

◇拠点形成概要

機 関 名	お茶の水女子大学		
拠点のプログラム名称	格差センシティブな人間発達科学の創成		
中核となる専攻等名	人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 耳塚 寛明 教授	外 16 名	

[拠点形成の目的]

本拠点は、格差にセンシティブ（敏感）な人間発達科学の創成と、その担い手となるソーシャル・ジャスティス（社会的公正）を探究する人間発達研究者、特に女性研究者の養成を目的として形成される。特に本拠点がめざす人材育成と研究活動の目的は、以下の通りである。

人材育成：本拠点では、従来人間発達研究者にしばしば見られた自身の研究領域と他の研究領域との関係、及び自分の行っている研究と社会とのつながりについて十分自覚的でないタコツボ化の傾向、そして、研究世界と実践世界が遊離し、社会的課題意識が希薄化する傾向を克服し、ソーシャル・ジャスティスを探究する人間発達研究者を育成することを目指す。

研究活動：本拠点では、21世紀COE「誕生から死までの人間発達科学」での実績と成果をふまえて、人間発達的时间軸を貫く格差の次元を**国際的格差、教育・社会的格差、養育環境格差の3つの領域**に設定する。そして、それぞれの格差領域ごとに、発達的时间軸を貫く格差の再生産構造を浮かび上がらせるとともに、その解明と構造転換への道筋を探究することをめざす。

[拠点形成計画及び進捗状況の概要]

拠点形成計画

(運営体制) 上述した国際的格差、教育・社会的格差、養育環境格差の3つの格差領域に、教員、院生、若手研究者が参加し、**学長のリーダーシップ**のもと、**人間発達教育研究センター**を組織的なコアに据え、**教育プログラム委員会と研究プログラム委員会**を中心とする運営体制のもとで、人材育成と研究活動を行う。さらに、複数の領域を担当する**オーバーラッピングメンバー（連携推進者）**をおき、既存の学問分野を越えた協働体制で教育研究を進める。海外研究者を含む外部審査委員で構成される**COE外部評価委員会**、及び研究倫理審査を行う**COE研究倫理委員会**を設置する。

(人材育成) **基盤教育プログラムと革新教育プログラム**で構成する。**基盤教育プログラム**では、RA制度による博士後期課程院生への**生活支援**、公募研究制度等による**自律的研究機会**の保障、研究発表支援プログラム等による**国際発信能力**の育成を3つの柱として取り組む。博士後期課程入学者全員を対象として、博士論文提出資格獲得までのステージを示して、複数指導教員による組織的な指導体制により学位取得を図る「**ステージ制**」を実施する。**革新教育プログラム**では、実践現場との**協働研究プログラム**により、研究世界と実践世界との協働＝コラボレートを推進するとともに、研究倫理委員会による**研究倫理審査**の実施による研究倫理教育を推進する。

(研究活動) 上述した3つの格差領域に即して、教育学・心理学・社会学からの**マルチアプローチ**によって格差の再生産構造を浮かび上がらせると共に、その解明と構造転換への道筋を探究する。

国際的格差領域では、グローバル化の下での国際的格差構造の解明とその是正のための教育支援のあり方を発達の各段階に即して解明する。**教育・社会的格差領域**では、主に教育学的、社会学的視点から、教育や職業を通して現れる格差のメカニズムを解明する。**養育環境格差領域**では、養育過程における家庭や保育・教育施設の中での環境と個人との時系列的な相互作用に着目し、人間の発達に沿ったケア・クオリティやQOLに現れる格差について、主に心理学的視点から解明をめざす。

進捗状況の概要

(運営体制) 平成19年度において、ほぼ計画通りの運営体制を確立し、海外研究者を含む外部評価委員会による外部評価を実施した。平成20年度末の時点では、事業推進担当者、大学院担当教員に加え、任期制の准教授、講師、助教等の特任教員・研究者11名が運営の中核を担っている。

(人材育成) 当初の計画を着実に実施したのに加え、**RA制度**について、博士後期課程1年次については原則として全員、2年次以降については、一定の業績基準をクリアした者全員に、**研究活動に専念することを可能にする水準の報酬**を支払えるよう制度の強化を図った。

(研究活動) 当初の計画に即して研究活動を実施し、特に以下の諸点について、**格差再生産構造のメカニズムの解明につながる新たな学術的知見**が得られた。①学校外教育支出と保護者の学歴期待による学力への強い影響の存在が確認された（日本社会のペアレントクラシー化の傾向）②養育の質の縦断研究により、養育者によるpositive care-givingによる問題行動発現防御、社会性発達促進機能とpositive care-givingの具現化に関連する構造的な社会要因についての知見が得られた。③発達行動遺伝学的縦断研究により、学齢期の問題行動の発現における家庭・学校生活に関わる環境的要因の重要性が明らかになった。④成人期の学びにおける知の格差に関するインタビュー調査から成人期の学びにおけるジェンダー、階級等による格差の出現の可能性が明らかになった。⑤高齢期の医療と介護に関する国際比較研究から、医療と介護の連携体制の重要性が明らかになった。

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価

(総括評価)

当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、女子大学の特質・環境・知的資産を活かしたプログラムになっているとともに、新しい研究領域を開拓する可能性を秘めており、高く評価できる。しかしながら、主題に関する研究については、国際的に卓越した拠点を形成するという観点から、より具体的に戦略を展開することが必要である。

拠点形成全体については、全学的に運営マネジメント体制が生まれ機能しており、評価できるが、国際的に卓越した拠点を構築するための具体的な展望が求められる。

人材育成面については、ステージ制、RA制度、公募研究制度などの各制度をはじめ、研究発表支援プログラム、若手研究者公募採用、国際セミナーなど注目すべき措置を講じているが、これらの措置が有効に機能するためには、参加している大学院学生の活動が世界的な拠点に見合う成果に到達しているかどうかについて、十分検証する必要がある。

研究活動面については、各種国際比較プロジェクトに関わる世界的に独創的な研究デザインを試み、国際的格差、教育・社会的格差、養育環境格差の比較を可能にする共有データベースの構築によって、新たな学術的知見を得る試みが行われており、評価できるが、格差是正の研究活動は、未だ学際的段階に止まっているように見受けられ、所期の「格差センシティブな人間発達科学」を学融的に構築する段階に到達するべく創造的な取組みによる改善が求められる。

補助金の適切かつ効果的使用については、かなり多額の国内・海外旅費が計上されており、世界的拠点形成に関わる研究活動の一環としての国内・国際学会発表の成果へと十分反映されることが期待される。

留意事項への対応については、概して十分な対応が行われているが、本拠点の主題である「格差センシティブな人間発達科学の創成」への学融的方法による展開を要望した点については、実証研究やプロジェクトにその試みが見受けられるものの、現在までの成果はマルチ・ディシプリナリーな連携の水準を超えた内容の創成には至っておらず、打開するためには方法論の構築を含めて、更なる検討が必要である。

今後の展望については、女性研究者養成を主眼とした主題はユニークであり、その観点から世界的拠点形成を行うという所期の目的を助言等を考慮して、十分達成することが期待される。